

クリティカル・リーディングを育成する「読むこと」領域の指導の工夫
～複数テキストの比較読みによる対話型学びを通して～

福島県教育センター 長期研究員 荒川 真彦

1 研究の趣旨

これまで自分が実践してきた「読むこと」領域の授業を振り返ってみると、教科書教材の内容読解に終始し、表現に込めた書き手のねらいをとらえようとして読む授業を、焦点化して指導できなかった。一方、PISA調査の結果では、日本の生徒は、情報相互の関係性を理解して解釈することが苦手であると指摘されている。また、平成25年度の全国学力・学習状況調査において、福島県では、文章の構成や表現の仕方などについて、根拠を明確にして自分の考えを書くことが課題として挙げられている。これまでの実践の反省や今日的課題から、「書き手の意図を見抜き、内容と表現・構成についての自分なりの考えを、根拠や理由を持って評価する読み」すなわち「クリティカル・リーディング」を育成することが生徒たちに必要であると考えた。

そこで、「対話型学び」を単元の中に位置付けることによって、様々なテキストを読み、それを解釈し、熟考し、評価できる生徒を育てたいと考えた。具体的には、まず、複数のテキストの「比較読み」を導入し、次に、書き手の表現のねらいについての考えを「伝え合う」活動を行うこととした。さらに、自分の考えの根拠や理由を「振り返る」ことを重視し、推薦文等によって表出させたいと考えた。このような指導法を提案して効果を検証するために、以下の仮説を設定し、本主題に迫った。

「読むこと」領域の指導において、以下の手だて1～3（「研究の概要」参照）を講じれば、クリティカル・リーディングが育成され、テキストに書かれた書き手の意図を正しく読み取り、その良し悪しを自分なりに判断、評価して、根拠と理由を明確にして伝えることができるだろう。

2 研究の概要

(1) 三つの手だて（＝「対話型学び」の三つの対話）に基づいた授業を行い、その効果を検証した。

① 手だて1＝「テキストとの対話」：比較読み

・ 比較しやすいテキストの提示

小学校での既習教材や同題材の評論を基に教師が自作したものを副教材として提示する。

・ 類似点と相違点を正確に把握する活動の実施

作品の構成や表現の工夫を表にまとめ、それを根拠にして書き手の意図を読み取らせる。

② 手だて2＝「他者との対話」：伝え合い

・ 他者との違いに気付くペア対話

書き手の工夫の意図を級友と対話し、気付いた他との違いを記録させる。

・ 書き手のねらいを見抜くグループ対話

熟考や評価を促す発問により、立場を決めてから根拠と理由を明確にして対話させる。

・ ファシリテーション・グラフィックの活用

4人グループの机上に台紙を設置し、対話で生まれた考えを書き込み、可視化させる。

③ 手だて3＝「自己との対話」：振り返り

・ ワークシート等による振り返りの蓄積

学習内容や気付いたことをワークシート等に記入し、考えの深まりを自覚させる。

・ 自分の考えを再確認する活動の実施

書き手のねらいについての考えを表出させる前に、根拠や理由の整合性を確かめさせる。

(2) 研究協力校（会津美里町立高田中学校 第2学年3学級）で検証授業を実施した。

7月と10月に、評論の授業（4時間×2回）を実施

3 成果と今後の課題（○＝成果、▲＝課題）

(1) 手だて1：「テキストとの対話」

○ 「比較読み」をすることによって表現の工夫等の相違点に気づき、それを根拠にした上で、書き手の意図に対する考えを持つことができた。

▲ 表現や構成の工夫を正確にとらえるために、用語等の基礎的知識を定着させる必要がある。

(2) 手だて2：「他者との対話」

○ 根拠や理由が明確になることで、意欲的に「伝え合い」に臨もうとする生徒の姿が見られた。

○ ファシリテーション・グラフィックと呼ばれる台紙に書き込みながら対話することで、考えの深まりが促進され、書き手の意図について多面的に考えて評価することができた。

(3) 手だて3：「自己との対話」

○ ワークシート等で、書き手のねらいに対する自分の考えの根拠と理由を「振り返った」ことで、自分なりの評価に自信を持って推薦文等を書くことができた。

▲ 自分の考えの基となる根拠や理由を、論理的に検証する指導を継続することが必要である。